

# 応えるために

## 患者の笑顔引き出した



「患者さんのために最大限の努力で向かい合いたい」と治療に臨む利森さん

利森 仁 (としもり ひとし)

1969年滋賀県生まれ。大阪歯科大卒。1999年、大阪市旭区でとしもり歯科医院を開設。2011年兵庫県南あわじ市沼島に松岡歯科医院を開設。

「先生、こんにちは」。軽トラから男性が声をかけてきた。「こんにちは。調子どうですか?」。船が沼島(ぬまじま)兵庫県南あわじ市IIの棧橋に着き、徒歩5分の診療所までの道すがら、島民から次々に声がかかる。

「開設した頃は野戦病院みたいでしたよ」と利森さんは当時を振り返る。一日に50人もの患者を処置した日もあった。診療所ができる前は、悪くなった歯が抜けるのを放置し、入れ歯も作らないので、歯のない人が多かったという。歯のメン

### 島の6割が患者 まるで治療の見本市



「島じゅう、僕が直した見本市のようですよ」と笑う。大阪市内で開業する利森さんが沼島に診療所を開設したのは2011年



訪問で口腔ケアを行う石垣さん(右)

「先生、診療所つくってや」「島内で治療を受けたい」。島民から南あわじ市に要望が出されるようになり、市長からも要請を受けたが、具体的な援助はなかった。

5面へつづく

週に一度、沼島を訪れるようになって、2年半が経つ。「今の人は漁師さ

らで、患者さんですよ」と利森さん。

診療所に着くと、すでに年配の女性が入り口の

前で待っていた。利森さん

と石垣さん、専属ドライバ

の草薙則雄さんは慣れた様子で準備にとり

かかる。この日もメンテナンス15人、処置5人で

チェアは埋まっていた。予約外の人も多く小さな待合室に患者が切れることがない。

メンテナンスに来たという漁師の男性(60)は、「前は淡路島の歯科

医院へ行っていただけ、船とバスを乗り継いで千

円以上かかるし、半日つぶれてしまう。痛みが出

るまで歯医者へは行かなかったよ」と白い歯をのぞかせた。

「入れ歯が欠けて噛めない」と訴えて高齢の女性

が飛び込みで来院した。チェアが空くのは1時間以上後になるため、利森さんは「電話するから家で待っていて」と優しく対応する。

小学生の子を持つ母親は、「子どもは平日、学校があるので、今までは土曜日の午前中に淡路島の診療所まで通院していた。放課後に行けるようになった」と喜ぶ。

「はじめは、交番もコンビニもない島で開業するなんてこれっぽっちも思わなかった。大阪の診療所の借金もあるし、い

まだに家族にも理解されていないです(笑)」

初めて沼島を訪れたのは9年前。沼島出身の患者に誘われて、子どもと

は、10年前に作った入れ歯が合わなくなったが、半寝たきりのため淡路島

まで通うのをあきらめていた。1年前に訪問診療で入れ歯を作り直し、いまは、毎週アフラシグ、口腔体操などを受けようになった。

島の人とのふれあいが楽しいという石垣さん。「早朝に発発し夜遅く帰る島の診療も苦にならない」と語る。

大阪の歯医者であることが島で知れ渡り、遊びに行くついでに歯の相談に乗るようになっていった。

沼島に歯科診療所があったのは、1950年ごろまで。島外の歯科医が島の民家を借りて週に何回か治療を行っていたが、そのうち来られなくなった。

「先生、診療所つくってや」「島内で治療を受けたい」。島民から南あわじ市に要望が出されるようになり、市長からも要請を受けたが、具体的な援助はなかった。

「島民の願いに応えたい」。悩んだ末に、土地を購入し診療所を建てた。機材を入れて数千万円になった。島の人口を考えると採算は取れないことは分かっていた。

### 悩んだ末に 採算は取れなくても

大阪の歯医者であることが島で知れ渡り、遊びに行くついでに歯の相談に乗るようになっていった。

沼島に歯科診療所があったのは、1950年ごろまで。島外の歯科医が島の民家を借りて週に何回か治療を行っていたが、そのうち来られなくなった。

「先生、診療所つくってや」「島内で治療を受けたい」。島民から南あわじ市に要望が出されるようになり、市長からも要請を受けたが、具体的な援助はなかった。

「島民の願いに応えたい」。悩んだ末に、土地を購入し診療所を建てた。機材を入れて数千万円になった。島の人口を考えると採算は取れないことは分かっていた。

## 利森先生の1日

6時30分  
大阪市旭区の診療所を出発  
淡路サーピスエリアで朝食



9時00分  
南あわじ市・土生港から貨客船「しまどり」に乗船



9時10分  
沼島港到着  
診療所まで徒歩5分の間に、島民から次々と話しかけられる



9時30分  
診療開始直後から続々と患者がたが来院



# 島民の願いに



窓を開ければ朝の香りが漂う港に面した診療所（左手前の建物）

## 患者に慕われた 祖父にあこがれて

滋賀県の栗東市で生まれた利森さん。3代にわたって歯科医師の家系で地域の患者に慕われていた祖父にあこがれて同じ道を目指した。医療技術に加えて精神的にも患者を元気づけられる「おせっかいな医療人が理想だ。この日の最後の患者は中学生の女の子。前歯がボロボロで笑顔が出せなかった。一日で全部治す

## 島で死ねない住民 医療の課題みえた

「介護サービスや病院がないため、住民は島では死ねないんです。3年目を迎えて島のかかえる医療や介護の課題が見え

## 16時間の強行軍に感服

新聞部 南端理伸

今回は、島に渡ってから島を後にするまで、丸1日同行させてもらった。島に渡ると、利森先生に住民が次々にあいさつしてくる。島の人びとに信頼され親しまれている様子が伝わってきた。医院に着くなり、一服することなく10分ほどで準備をすませると、さっそく診療開始。

昼休みは1時間だけ休診す



利森さん（左）にインタビューする南端部員

るが、この日は訪問の予定が入っていた。ところが、前の週が台風で休診だったこともあり、予約外の患者さんが多く、訪問どころか昼食もまともに食べられないほどの忙しさ。そんな中でも、親しみと柔らかな笑顔で患者に接する姿勢が印象的だ。島民に慕われる理由もわかる気がした。

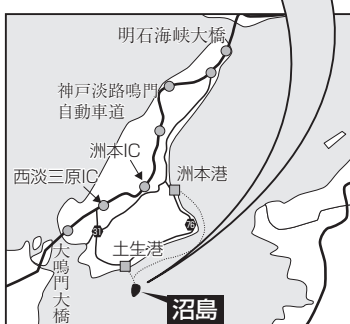
午後もずっと診療しっぱなしで、訪問へは夕方になって衛生士の口腔ケアだけに変更せざるを得なかった。

診療が長引いたため、予定の船に乗れずじまい。知り合いの漁師さんに漁船で送ってもらうことに。

大阪で開業しながら、移動を含めて一日の行動は16時間の強行軍。これを毎週続けている利森先生のバイタリティーに感服した。

## 沼島（ぬしま）

兵庫県内最南端の離島。漁業で栄え、最盛期には3,000人の島民が暮らしたが現在は約500人。東南海岸には「上立神岩」などの奇岩が点在する。「古事記」「日本書紀」の神話では、天つ神に国造りを命じられたイザナギ、イザナミの二神が沼予（ぬぼこ）で、かき回し引き上げた矛の先から、落ちた雫が固まってできたのが沼島と言われる。



景色が開け、海と島とを分ける切り立った海岸線が続いているのが見える。天気がよければ、紀伊水道の向こうに和歌山が望めるという。「この坂を下りたら上立神岩が見える



◀上立神岩

▼泥地で育つ沼島のハモは皮が軟らかく、味が濃厚



「ハモすきは水に醤油、砂糖やみりんなどで味付けした汁に、淡路島産の玉ねぎや野菜を煮込んでいく。沸騰した汁にハモの切り身を置いてしばらくすると、白い身がふわふわとそり返った。旨い。肉厚で歯ごたえのある身に浸み込んだ甘辛だし汁とハモの旨みが口の中に溢れた。

## 神話とハモの島

曲がりくねった山道を抜けると、車のフロントガラス越しに海が広がっていた。霞んだ青黒い島が沖に浮かんでいる。淡路島南西部、沖合4キロの紀伊水道北西部に位置する周囲10キロの小さな島が沼島だ。

「で」と恩地さん。山肌に沿って坂道を下ると、「矛先」のような形をした岩が海から突き出していた。高さ30メートル。7から8階建てのビルに匹敵する。国生み神話にも登場する「天の御柱」とも言われる巨岩である。しばしの間、岩を眺めたが、空腹に促され、来た道に戻った。

島民はほとんどのいない。患者が減れば、島の診療を続けられなくなる日があることも想像している。「年老いても沼島で住み続けられるように、医療・介護へのアクセスをよくする仕組みづくりが必要だ」と利森さん。

「ハモすきは水に醤油、砂糖やみりんなどで味付けした汁に、淡路島産の玉ねぎや野菜を煮込んでいく。沸騰した汁にハモの切り身を置いてしばらくすると、白い身がふわふわとそり返った。旨い。肉厚で歯ごたえのある身に浸み込んだ甘辛だし汁とハモの旨みが口の中に溢れた。

12時30分  
お世話になってる福田のおばちゃんから差し入れの昼ご飯を食べる

13時00分  
昼食時間を惜しんで診療再開  
「差し歯が取れた」というおばあちゃんの姿も

17時00分  
訪問診療で94歳の沼津さんの口腔ケアと嚥下体操

18時15分  
福田のおじちゃんの漁船で土生港に到着

21時30分  
大阪市旭区の診療所に到着

